

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ 【番外編】 ～Speaking力を伸ばすあの手、この手②～

田邊 祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

熟練教師が超多忙な教師生活の中でどのようにスピーキング力を磨いてきたのかをお届けする第二弾です。

田邊：今回はinput手法の話でしたが、ここからはoutputへと移ります。inputしたものをoutputに連絡し、“もまない”とせっかくのinputも運用知識にはなりにくい。連絡の方法をカナダの応用言語学者 M.Swain が“pushed output”と名付け、P.Nation なども盛んに言及しています。校務やクラブ活動などで、先生方は十分過ぎるほどpushされて、これ以上どうするのかと言われそうですが、そうした逆境の中、いかにしてスピーキング力を磨かれているのかという話をお願いします。

A 先生：まず、日頃から自己発信をする場合にはできるだけ英語を使うことを心がけることでしょう。pushed outputの正式なところはわかりませんが、授業そのものが、私たちにはその場に当たると考えます。生徒に英語で話すということは、それがoral introであろうと文法説明だろうと、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) から CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) までを含む幅広いoutput力を要求される真剣勝負です。こちらも準備には手を抜けません。例えば音読などを見事にこなした生徒に、「はい、みんなで拍手！」などとほめますが、“Let’s give him a big hand!”というワン・パターンだけではなく、“Big applaud!” “Clap our hands!” “Let’s hear it for Yuki!” などバリエーションに富んだほめ言葉を使おうと意識するのです。そんな意識で英語を使う、それこそが私なりの“pushed

output”だといえます。

B 先生：同感です。私はいかこれ20年、その日の出来事を1分間スピーチとして教室で披露しています。ただトピックが長いものや難解なものは、当然ダメですね。英字週刊紙(The Student TimesやThe Asahi Weeklyなど)をsourceにしていますが、ニュースは生ものです。そこで辿り着いたのが、News on Japanというサイトです(<http://www.newsonjapan.com>)。

このサイトはNHKやJapan Newsなどからの短信(文字のみ)で構成されています。先般の新幹線の事件では3年生の授業で、The man set himself on fire on a Tokaido Shinkansen train. という文を含んだ記事を使いました。記事をパソコンのスピーチ機能で読み上げさせ、それをiPhoneで録音し、音声データをメールでパソコンに送信して取り込むのです。それを通勤の車中で流してinputし、それから授業にのぞみます。もちろん私が一方的にスピーチをするのではなく、The man () himself on () on a Tokaido Shinkansen () .のようにcloze test風に仕立て、dictoglossとして使ったり、さらには文のshadowingに使ったり、通訳のまねごとをさせることもあります。これが私なりのpushed outputとなるでしょうか。

C 先生：面白い！ 私も真似します(笑)。私の場合、授業の場を少し拡大解釈し、職場といいますが、学校そのものもoutputの場になるのではないかと考えています。例えば、職員会議、英語科会、ALTとの折衝やPTAとの会合、入学・卒業式などの式

典のあいさつなどは格好の素材です。発言やあいさつを通訳したり、それがかなわないときには頭の中で英訳するのです。そして瞬時に訳せなかったときにはそれらをあとでチェックします。よい例なのかわかりませんが、「お疲れさま(さん)」という表現を今、思い浮かべました。同僚同士で頻繁に使うあいさつですが、英語には相当する表現がないなど、思っていました。海外のsit-comの中で、「Good work today.」と言っているのを耳にしました。しめしめとあって、早速ALTに使ってみると、「少し違うけどほぼ同じ。"Good job today."という場合もあります」と教えてくれました。このように、自分が今いる環境でも、入れて(input)、出して(output)、内在化するというサイクルをちゃんと作ることができるんだと納得した次第です。

A 先生：私の場合も同僚とのsmall talkでは、極力英語で話しかけるようにしてきました。新人教員は最初少し面食らうわけですが、こういう性格ですので(笑)、押し通していくと、5月頃には向こうの方から“Good morning.”と応じてくれるようになり、科会なんかでもALTの有無にかかわらず、英語による発言も自然に出て、英語環境が英語科で広がっていきました。こちらの心がけ次第でいろいろな形でのpushed outputは創造できるのです。

田邊：pushed outputは部活にたとえるなら運動部の練習試合、地区大会や県大会などが相当すると思います。そうした対外的な機会を利用して、pushを図られたことはありますか。

C 先生：最近はなくなってしまい、残念の一言ですが、かつて存在した英語教員のスピーチコンテストに何度も挑戦したことがあります。最高で3位入賞したことはありませんでしたが、スピーチの構想からはじまり、原稿書き、発音練習などを経て、本番では聴衆という人前で話すという試練！ ああいうのがスピーキング力を鍛えてくれるんですよね。

B 先生：そうそう。昔は英字新聞などのコンテストものが結構ありましたよね。新人の頃はよく利用し

たものです。それから私は野球部と英語部(ESS)の顧問だったので、区のレシテーションやスピーチコンテスト、海外ペンパル、国際交流行事などなどに生徒を参加させました。彼らに指導することで、すっかり自分が練習したりもしていました。

A 先生：確かに同じようなことを自分もやってきました。今ではコンテストなどの審査・講評を務めさせていただいていますが、審査をし、英語で講評をするということ自体“pushed output”ですね。

C 先生：同じように英検などの面接官の機会があれば、これも若い時分からぜひチャレンジしてみてください。事実上、年に3回は無理かもしれませんが、interviewというのは務める側にも大きな責務があり、大いなる“pushed output”なのです。

A 先生：最後になりますが、研究授業を引き受けるというのもためになります。うちの場合、区の中英研が主体の研究授業がありますが、授業力もさることながら、何よりも「聞かせる英語」に自分の英語を仕上げていかなければならない。運動部の中体連の大会、いやその全国版と同じような磨き込みが必要です。発音から表現など、これから学べることは数多くあります。さらに、私たちには敷居の高いところもありますが、学会(語研、全国英語教育学会など)や研究会(全英連、英授研)などで、英語で発表してみるというのも若い諸君にはお奨めします。

田邊：お話を伺っていると、身の周りの環境、そこにある機会を眠らさずに活かしてこられたことがよくわかります。その過程にはinput→output→reflection/revision→outputというサイクルが見えます。時間はかかるかもしれませんが、こうしたサイクルを積み重ねることでしか、スピーキング力、さらに言えばプレゼン力は身につかないのかもしれない。みなさん、今回はどうもありがとうございました。